「存在する」ことの不思議さを哲学する

『ハイデガー＝存在神秘の哲学』

古東哲明著／講談社現代新書

「哲学」という言葉を聞いてみなさんはどのようなイメージを持つでしょうか。人間はどう生きるべきかなどと「人生観」として捉える人もいれば、自分の仕事を首尾一貫して行うための「理念」として捉える人もいるでしょう。しかし学問としての「哲学」(philosophy)とは、少し意味が違います。哲学とは「知」(sophia)を「愛すること」(philos)が原義とされています。では「知を愛する」とは何を意味しているのでしょうか。それは社会や自然の構造を正しく「知る」ことを愛好する態度を意味しており、「知る」ことによって「真理」への道が開けます。したがってみなさんが本学で工学や技術を学ぶことも、「哲学的」ということができます。

しかしこのような意味とは異なる「哲学」を探究した哲学者がいます。それがマルティン・ハイデガー (Martin Heidegger) というドイツの哲学者です。彼は「存在する」ことの本質に着目します。たとえば「なぜ物があるのか?」と考えてみてください。茶碗を考えてみましょう。色が青い、形は丸いなどと存在様式を分析することができても、「茶碗がある」こと自体の意味はわかりません。哲学者や科学者が築いてきた学問体系とは、存在を前提とした存在理論にすぎないのです。しかしハイデガーはあえて、「在る」ということの本質を解明しようとし、これは西洋哲学史を根底から塗り替えるような、大きな挑戦です。ハイデガーが1927年に出版した『存在と時間』はまさにエポックメイキングな書でした。

以下ハイデガーの考えの要点をまとめてみます。まず「存在する」ことの本質を問えるのは人間 (=「現存在」と名付けられる) だけである。だが人間は普段日常生活に浸かってしまっているため、存在への問いを発することはできない。しかし「不安」に襲われた時はじめて、存在の本質に直面する。ここからハイデガーは人間 (現存在) の分析に移ります。人間とは何か。人間とは「時間」である。「時間」といっても時計で計られるような数値化された時間ではなく、一瞬一瞬に生まれては消える刻一刻の「時」を意味している、というのが大まかな筋立てです。以上ハイデガーの哲学を粗描しました。

さて『存在と時間』の原著を直接読むことをお勧めしたいのですが、やはり哲

学書は難しいと思います。本書では難解な訳語もわかりやすい日本語に置き換えられ、大変読みやすく述べられています。哲学はみなさんの専門領域に直接関係しないかもしれませんが、「物事を突き詰めて考える」という哲学的姿勢は将来必ず役に立ちます。私自身は本書を読んで共感できる部分もあれば、少し違和感を覚える箇所もありました。自分自身で考えることもまた哲学です。お時間のある折に、ぜひご一読ください。

執筆者紹介

田中 潤一

教育開発系准教授。専門領域は、哲学・教育学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『ハイデガー＝存在神秘の哲学』古東哲明著 講談社（講談社現代新書） 2002年 777円

『存在と時間 1・2・3』ハイデガー著 原佑、渡邊二郎訳 中央公論新社（中公クラシックス） 2003年 各1,680円

[ブックガイド目次へ](#)